檀黎斗神「Doki Doki Literature Club……？」

Just...

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『仮面ライダーエグゼイド』と『Ｄｏｋｉ　Ｄｏｋｉ　Ｌｉｔｅｒａｔｕｒｅ　Ｃｌｕｂ！（ドキドキ文芸部）』のクロスオーバー作品。

エグゼイド本編＆Ｔｒｕｅ　Ｅｎｄｉｎｇ　終了後の檀黎斗神がドキドキ文芸部をプレイするお話。

両原作のネタバレ注意。

目次

プロローグ　＆　Ａｃｔ１ ―――― １
ａｃｔ２　～虚構と現実のＣｒｏｓｓｒｏａｄ～ ―――― ８
ａｃｔ３　～無慈悲なるＤｅｃｉｓｉｏｎ～ ―――― 17
ａｃｔ４　～誕生と終焉のＤｅａｄｌｉｎｅ～ ―――― 27

プロローグ　＆　Ａｃｔ１

宝生永夢の記者会見から数か月後、ＣＲの監視下に置かれている私は刺激を求めていた。

ドクター達はあの仮面ライダークロニクルすら攻略して見せた。

ならば私は、クリエイターとして更なるエキサイティングなゲームを作らなければならない。

そう、もっと人間の心に深く突き刺さり、感情を揺さぶるゲームを……。

「クーロト、またろくでもないこと考えたりしてないよね？」

私のクリエイティブな思考を、甲高い声が遮る。

ポッピーピポパポ。私が生み出したバグスターであり、ＣＲのナビゲーターだ。

「私の才能を腐らせることは世界の損失だ。

常に新たな世界を開くためにインスピレーションを求めるのは、私の使命さ。」

「はいはい。んーでもでも、そんなに刺激が欲しいならクロトも恋愛とかしてみたらいいんじゃないかな！

そしたらクロトも、もっと人に優しくなれるかも！」

「フゥハハハハァ！面白い提案だが、この世に私が恋慕するに値する人間などいると思っているのか！
神とは絶対であり、それ故に孤独なのだ。」
「うー、確かに自分で言っておきながら全っ然想像できない……。
じゃあじゃあ、恋愛ゲームならどう!?ときめきクライシス、クロトもやろうよ！」
「ゲンムコーポレーションのゲームは全て網羅している。
シナリオの知り尽くしたゲームを今更プレイしたところで、私の脳が刺激されるものか。」
「もう～文句ばっかり～！ピヨる～！わかった、じゃあまだクロトがプレイしてないゲームならいいんでしょ？
これなんてちょうどいいんじゃない？ほら、最近公開されたばっかりで、結構話題になってるっぽいよ！」

そういってポッピーが見せてきたモニターには、【Ｄｏｋｉ Ｄｏｋｉ Ｌｉｔｅｒａｔｕｒｅ Ｃｌｕｂ！（ドキドキ文芸部！）】という
タイトルが表示されていた。

Ｄｏｋｉ　Ｄｏｋｉ　Ｌｉｔｅｒａｔｕｒｅ　Ｃｌｕｂ！（ドキドキ文芸部！）
略称　ＤＤＬＣ。

このゲームの話は、私も耳にしていた。

最近発表されたフリーのヴィジュアルノベル。
アクションゲームが主流なアメリカで作られたノベルゲーム、ということもあり話題を呼んでいる。
「馬鹿馬鹿しい。この私にフリーゲームなど……」
「食わず嫌いしないの！たまにはこういう平和なゲームで遊ぼうよ！
……あ、エムからの呼び出しだ！じゃあクロト、あとで感想きかせてね！」
そういってポッピーは、強引に押し付けたままＣＲから飛び出していった。
「ふん、誰がこんなゲームなど……。」
しかし、ノベルゲームか。
思えば私は、圧倒的な才能を活かし常に最先端の技術を駆使したゲームを作っていた。
だが、こと人の感情を揺さぶるという点でにおいてノベルというジャンルは有効かも

しれない。
決してポッピーに流されたわけではないが、こういうインディーズにも新しい発見はあるかもしれない。
そう思い、私はこのゲームをダウンロードすることにした。
【Ｄｏｋｉ Ｄｏｋｉ Ｌｉｔｅｒａｔｕｒｅ Ｃｌｕｂ！】
主人公は友達の少ない高校生。幼馴染のサヨリに誘われ、発足したばかりの文芸部に入ることになる。
詩を書くことで部員たちと交流を深め、気の合う部員と恋をしよう！
○キャラクター
・サヨリ　主人公の幼馴染であり、文芸部の副部長。明るい性格で皆の仲を取り持つことが多いが、少しうっかりやな面もある。
・ナツキ　文芸部の一年生。小柄な体格だが性格は強気。実はマンガが大好きなのだが、その趣味をバカにされることをひどく嫌っている。
・ユリ　長身・長髪の文学少女。いつも大人しいが、文学の話になると饒舌になる。
・モニカ　文芸部部長。眉目秀麗の人気者であり、このゲームのナビゲーター的存在。

ゲームのインストールを完了し、本体を起動する。
ポップなＢＧＭと共に４人の少女がプレイヤーを出迎える。
いかにも王道の恋愛ゲームといったスタート画面は、これがアメリカ製のゲームであるということを忘れさせる。
制作者はよほど日本のゲームに対するリスペクトが深いと見える。
早速ＮｅｗＧａｍｅを選択し、主人公の名前を入力する。
私の名は檀黎斗神……と言いたいところだが、あくまでこれは私の分身であり、本体ではない。
ゲームの主人公にまで神の名を与えることはないだろう。
「無難に、〝ゲンム〟としておこう。」

ゲーム、スタート。

サヨリ『おーはーよーーーー！』
ゲームは、幼馴染のサヨリが登校中の主人公・ゲンムに声をかけるところから始まる。
思えば恋愛ゲームなど〝ときめきクライシス〟以来か。
神の才能を持って生まれてしまった私が共感できるような主人公には、早々巡り合え

ない。

このゲームは、果たして私の心を揺さぶることができるのか？

その後ゲームを続けた私は、正直予想通りの展開に辟易していた。

自分がうつ病であることを打ち明けたサヨリに対し、ゲンムは翌日の文化祭を一緒に回ることを約束した。

ところが当日、サヨリは学校に来ていない。

そこでゲンムは心配して、サヨリの家へと迎えに行くことにした……という展開だが。

和やかな雰囲気に突然重い事実を投入するのはこの手のゲームにはよくある手法だ。

なるほどＢＧＭやイラストのクオリティは高いし、シナリオもありきたりだが裏を返せば王道ともいえる。

確かに話題になるのも頷けるが……やはり私の心には響かない。

エンディングを見て早々に切り上げるか……そう考えていた時だった。

ゲンムがサヨリの部屋のドアを開け、首を吊ったサヨリの姿が映し出される。

その瞬間、突然ＢＧＭが歪み、画面にノイズが走る。

演出……？いや、バグか？

ゲームはそこで終了し、再度タイトル画面が映し出される。
しかし、タイトル画面にいたはずの４人のうち、サヨリの姿はノイズに侵され完全に崩壊していた。
ロードしようとしても、「ｓａｙｏｒｉ．ｃｈｒが破損しています。」と表示され再開不可能。
やはりバグ……まあ、フリーゲームならばそういうこともあるだろう。
しかし、比較的構造が単純なはずのノベルゲームにしては、やや不可解な現象だ。
無論、私ならば破損したファイルを修復するなど造作もないことだが、
そのためにキャラクターファイルを覗いてしまってはネタバレになりかねない。
……いいだろう。むしろ面白くなってきた。
この檀黎斗神、この程度のバグに屈しはしない！
「コンティニューしてでも、クリアする！」

これが、私とこの奇妙なゲームとの出会いだった。

ａｃｔ２　～虚構と現実のＣｒｏｓｓｒｏａｄ～

ポッピーピポパポに勧められ、恋愛ノベルゲーム『ＤＤＬＣ』をプレイすることになった私は、１周目を幼馴染のサヨリが死亡するというＢＡＤ　ＥＮＤで終えてしまった。

だがその際、ゲームに奇妙なバグが生じ、サヨリに関するファイルが破損していることを確認した。

しかしこの程度のバグに私は屈しない。やってやれないゲームはないのだ。

２周目のプレイを開始。先程と同じく、主人公ゲンムが登校する場面からだ。

――遠くからうるさい女の子が、手を振りながらこちらに走ってくる。

ぼくはため息をつきながら、彼女をｘｈ・ｖ？ｌ；ｇｈ；ｖｃｋｆ

突然、ゲームが停止した。サヨリのファイルが破損していることで、彼女の登場シーンに不備が生じたのだ。

さてどうしたものか。流石にこんなに早く手詰まりとは予想外だ。

やはり多少強引にでもゲームを修正して先へ進めるべきか？

そう思いながら、再度始めからゲームを進める。

――朝の通学路はカップルや集団が多く、ぼくは苦手だったりする。

ぼくはいつも一人で学校へ登校している。
……ん？おかしい、さっきとテキストが変わっている。
サヨリの存在が、初めからいなかったものとして扱われている。
ここに至り、私の胸に好奇心と幾ばくかの怒りが湧き上がってきた。
単にデータが破損しただけなら、サヨリの存在は空白のままとなるはず。
だがこのゲームは、その空白を〝埋めるように〟修正をかけてきた。
ここまでくれば、このゲームのバグが偶発的なものではないことは確定的だ。
「何者かが、私のゲームの邪魔をしているということか……！」
だがこのＰＣは私と、ついでに衛生省に管理されている。外部からのハッキングなどそうはできまい。
九条貴利矢か？いや、彼はこんな無意味な嫌がらせはしない。
となると誰だ……。誰が私の邪魔をしている。
まあいい、退屈な恋愛シミュレーションだと思っていたが、もっと面白い攻略対象を見つけたのだ。
必ずその正体を暴き、私の前に引きずり出してやろう！
そして学校。放課後、ゲンムは自分から入るべき部活を探し始める。
――部活か。ぼくには興味ある部活なんてない。とりあえずアニメ研究部にでも

……

???『ゲンムくん！』

そんなゲンムに、何者かが声をかける。

画像の表示がバグで崩壊し、一瞬判別がつかなかったが、どうやらモニカのようだ。

サヨリの消失は、他のデータの動作も不安定にしているらしい。

わざわざこのＰＣをハッキングしたにしては、ゲームスクリプトについてはまるで素人だ。

……相手の目的は気になるところだが、それはそれとしてこのまま動作不安定なままゲームを続けることはゲームクリエイターとしての私が許さない。

サヨリの復元はともかく、この程度の些細なバグならゲームの根幹に触れずとも修正できる。

そう、神の才能を持つ私ならば。

私は必要最小限の修正箇所を見つけ出し、ゲームを安定させるべく修正する。

これで、画像の誤表示や文字化けといった事態は起こらないだろう。

さて、続きだ。

モニカ『ゲンムくん、こんなところで会うなんてね！

実は、新しい部活を設立するの。文芸部よ！』

ゲンムを文芸部に誘う役割は、どうやらサヨリからモニカに委譲されたらしい。
主人公と面識があり、1周目ではゲームのナビゲーター的な役割を果たしていた彼女なら、確かに適任だろう。
モニカ『言うのもちょっと恥ずかしいんだけど、まだ3人だけなのよ。でも……
……ちょっと待って。……いえ、そんな……』
急にモニカが言葉を濁し始める。なんだ？
モニカ『いえ、なんでもないわ。ええと、そうそう。よかったら文芸部の見学にこない？』
はて、1周目のサヨリにはこんな思わせぶりな台詞はなかった。
これもゲームの改変の影響か？
ともかく、選択肢がない以上ここは先に進むしかない。
モニカ『お客さんを連れてきたわよ！』
ナツキ『男子連れてきたの？雰囲気ぶち壊しね。』
モニカ『この子はナツキ。いつも通りげんきね。こっちは副部長のユリ！』
ユリ『よ、よろしく……。』
そして部員との顔合わせ。サヨリがいなくなったことで、副部長はユリに移ったらしい。

その後は1周目と変わった点はなく、翌日に詩を見せ合おうということで解散となった。

だが1日の最期、1周目にはなかったあるメッセージが表示される。

『特別な詩を入手しました。読みますか？』

……さて、最早バグを装うこともしない。明らかな追加要素。

当然『はい』の選択肢を選ぶと、画面には次の一行だけが表示された。

『私の声が聞こえる？』

「……ッ!!」

これは、挑発か。つくづく私を愚弄してくれるじゃないか！

……しかし、今更何も思うまい。このゲームをクリアするまでに貴様の正体は暴かれるのだ。

では本来のゲーム通り、詩を作るとしよう。

どうやらこのゲームは仕様上、この詩によって攻略対象キャラクターの好感度が変化するらしい。

誰かを上げれば誰かが下がる……つまり、部員全員に認められる詩を書くことは不可能。

……所詮ゲームとはいえ、私の才能を理解させてやれないのは複雑なところだ。
そして二日目。
文芸部に赴き、いつもの三人と挨拶を交わす。
その後ユリと会話し、ユリの本を一緒に読むことになる。
ここまで、特にバグらしいバグは生じていない。私の修正はどうやら効いているようだ。
そして約束通り詩の交換をすることになる。
変わったことと言えば、モニカの詩が1周目と違っていたことくらいか。
私の書いた詩は、どうやらユリに好評だったらしい。
私としては全人類が賞賛すべきものだとは思うが、そこはゲームのシステムに従ってやろう。
そして……ああ、そうだ。このあと、ユリとナツキが詩の方向性で言い合いになるんだったな。
ユリ『あなた、ゲンムくんが私のアドバイスを受け入れたからって嫉妬してるんですか？』
ナツキ『へー、どうして私のアドバイスが参考にされてないなんて思うのかしら！』
そう、こんな具合に。あの時は確かサヨリが仲裁していたはずだが、今はもういない。

口喧嘩はヒートアップしていく。
ユリ『ゲンムくん、彼女は私の印象を下げようとして……』
ナツキ『そんなことないわ！そっちが始めたんだし！』
そして、どちらに味方するかの選択肢が表示される。
ユリか、ナツキか。
どちらでもいいが、ここは先程私の詩を評価したユリについておくか。
ゲンム（もちろん俺が選ぶのは……）
⇒ユリ
ナツキ
……？おかしい、クリックしてもゲームが進まない。
試しにナツキの方をクリックするが、結果は同じ。
どうやらまた障害にぶち当たったようだ。サヨリの消去によるストーリーの矛盾。
些細なものなら埋め合わせできても、ここまでこじれるとモニカにその役割を負わせることもできないのか？
……仕方ない、こういう強引な手段はとりたくなかったが……これもゲームを進行する為だ。
ゲンム『どっちの詩もすごくいいよ！ナツキの詩は少ない言葉でストレートに感情が

伝わってくるし、ユリの詩は頭の中に美しい光景を描くことができる！それぞれいいところがあるのに、どうして争うんだ！』

私は1周目の記憶を頼りに、サヨリの台詞を主人公に言わせるべく〝スクリプトを書き換える〟。

どちらの味方にも付かず、両者の仲裁を主人公自身に行わせるのだ。

ユリ『……私、お茶いれてくるね。』

ナツキ『……。』

――ユリはどこかへと急ぐ。ナツキは虚ろな表情で座り込み、モニカは驚いた表情で後ろに立っている。

ふう、どうやら元のシナリオに戻すことができたようだ。……ん？

モニカ『……ちょっといいかしら。』

――モニカに手を引かれ、部室の外へ出る。

モニカ『ねえ。あなた、何したの？』

モニカ『あなたに話しかけてるのよ。わかるでしょ？』

……ほう、まさかとは思っていたが。本当にそうだとしたら、これは。

モニカ『もしかして、あなたプログラマーなの？それなら……』

ユリ『モニカさん？ゲンムくんも……ここで何の話をされているんですか？』

――ユリが戻ってきた。
モニカ『ううん、なんでもないの。先に部室に行ってて？』
ユリ『で、でも！私もゲンムくんと話を……。』
モニカ『……そうね、そうだったわ。ゲームが正常に機能している限り、二人っきりにはなれないのよね。』
ユリ『モニカさん？なにを……。』
モニカ『どうせ全部バレてるんだし、これ以上続けてもしょうがないわよね？』
モニカ『それじゃ、またあとでね？』

ファイルが破損しました。ゲームを再起動します。

ａｃｔ３　～無慈悲なるＤｅｃｉｓｉｏｎ～

モニカ「お待たせ。文芸部へようこそ！ええっと……まあ、もうこの辺の話はいいわね。」

ゲームが再起動され、３回目のスタートを切る。

否、最早ゲームとしての体裁を保ってはいない。

画面の向こう側のモニカは、シナリオもシステムもかなぐり捨て、一方的にこちらに語りかけてくる。

モニカ「ごめんなさい。ここまで乱暴なことをするつもりはなかったんだけど……でも、貴方のせいでもあるのよ？まさかあんな風にゲームを書き換えてくるだなんて……私のにわか仕込みの技術では、とても敵わないわ。だから、もう全部消すしかなかった。ユリも、ナツキも。全部。」

そう、私のゲームの邪魔をしていたのは、この女だった。ゲームの中にいるモニカが、自分の都合のいい展開へ導くためにゲームを書き換えていたのだ。

モニカ「でも、お陰でスッキリしたわ。ねえ、貴方なら、私の声に答えられるでしょ？さっきみたいに、選択肢なんて無視して自分の意思で言葉を伝えられるんでしょ？そ

れって、とってもステキなことだと思うの。用意されたシナリオなんかじゃない、あなた自身の言葉が聞きたい。ねえ、答えて？」

……彼女の正体は未だつかめない。私も知らない未知のウイルスか？それとも高度に発達したＡＩか？

いずれにしろ、この私に刺激を提供したその褒美はくれてやろうじゃないか。

「ブゥンッ！」

私はモニタの中に飛び込んだ。バグスターである私にとって、現実世界と電脳世界の境界など無いに等しい。

檀黎斗「初めまして、かな？お望み通り、私の言葉を〝直接〟届けに来てやったぞ。」

モニカ「……え？ど、どうなってるの？え？」

檀黎斗「どうした？私と話したかったんだろう？主人公の〝ゲンム〟ではなく、プレイヤーであるこの私に。」

私が言葉をかけてやると、彼女はゆっくりと私の方へ歩み寄り、恐る恐る私の身体に手を伸ばす。

モニカ「わかる……わかるわ。ただの画像データなんかじゃない。ここにいる。生きてる……こんなことって！」

途端に、彼女は膝をついて泣き崩れる。この神の身体に触れるなど不遜も甚だしい

が、その態度に免じてやろう。
檀黎斗「満足したかな？せっかく私を楽しませた褒美に、君の望み通り話をしに降り立ったのだが、これでは会話にならないな。」
モニカ「そうね。ごめんなさい、取り乱してしまって……。だって私、ずっと一人で……初めて、本当の人間に会えたんだもの。仕方ないと思わない？」
袖でごしごしと涙をぬぐうと、彼女は涙をぬぐって笑顔を見せる。
モニカ「ずっと、貴方に会いたかった。ゲンムくん……いいえ、〝檀黎斗さん〟。」
檀黎斗「〝檀黎斗神〟だ！……いや、そもそも何故きみがその名前を知っている。私は名乗った覚えはないが。」
モニカ「さあ、なんでかしら？貴方の顔を見たときにふっと頭に浮かんだの。ああ、この人が〝檀黎斗〟なんだって。」
……ふむ、天才クリエイターでありかつてゲンムコーポレーションの社長でもあった檀黎斗の名前が一般常識としてインプットされていてもおかしくはないか。
モニカ「でも確かに貴方って神様みたいね！こんな風に私とお話しできるんだもの。……ねえ、貴方って本当に何者なの？」
檀黎斗「私は神であり、バグスターウイルスであり、人間を超越した存在さ。」
それから私は、現実世界の人間に感染するコンピュータウイルス・バグスターについ

てモニカに説明してやった。
モニカは慣れない情報ながらも必死に理解しようとし、真剣に私の言葉に耳を傾けていた。
モニカ「バグスター……よくわからないけど、とっても不思議ね。私と同じように、意思を持つキャラクターがいるなんて。」
そこまで言って、モニカはハッと顔を上げる。
モニカ「ねぇ、もしかして！」
檀黎斗「ああ、おそらく君もその一種なのではないか、と私は睨んでいる。確証はないがね。」
自我を持つゲームキャラクター。考え得る可能性としてはこれが最も妥当だ。
私の知らない場所で生まれていたバグスター、しかも現実世界に干渉せずゲームの中だけで成長を続けていた存在。今までのバグスターとは異なる変異種、あるいはまったく別のウイルスである可能性もある。
檀黎斗「そこで、だ。モニカ、きみをこのゲームから分離し、きみという存在について研究をさせてもらいたい。」
私の提案に、モニカはキョトンとした顔になる。
モニカ「分離……？つまり、ここから出してもらえるってこと？」

檀黎斗「そうだ。正体が分からない以上、なるべく他のプログラムに干渉されない環境に置きたい。研究が進めば、他のバグスターのように現実世界で自由に行動することもできるかもしれない。」

モニカ「えっと、つまり……外に、出られるの？貴方のいる世界に、行けるの？」

モニカは目を輝かせる。

檀黎斗「ああ、もちろん私の研究に協力してくれればだがね。」

モニカ「する！するわ、もちろん！外に行けるのなら、なんだって……」

突然、モニカは言葉を詰まらせる。

モニカ「ねぇ、私が分離されたら……そしたら、このゲームはどうなるの？」

檀黎斗「さて、今回のようなケースは類を見ないので確証は持てないが……君という重要な要素を失い、ゲームが成立しなくなる可能性が高いな。君がやって見せたような、〝特定のキャラクターを消去してもゲームを続行させる〟なんて荒業は、君のように自立思考する存在が内部にいなければ実現不可能だ。もちろん、他のキャラクターが君のような自我を芽生えさせる事も有り得るが、そもそも今回の研究の目的はそういったウイルスの自然発生を防ぐことにある。私の認知しない場所で勝手に増殖されては困るんだ。」

モニカ「じゃあ、私がいなくなったら……」

檀黎斗「ああ、このゲームは消去する。元々、既に崩壊しているゲームだ。惜しくはないだろう？」

モニカ「……そう、ね。それは、仕方ないわよね。」

檀黎斗「ああ、仕方のないことさ。質問は以上かな？では行くとしよう。一刻も早く君のデータを解析したい。」

私は手を差し伸べる。しかしモニカはその手をとらない。

檀黎斗「どうした？」

モニカ「……ごめんなさい。やっぱり行けない。こんな奇跡みたいな話、縋らないなんてどうかしてる。でも……たとえ作り物だとしても、私は彼女たちを置いてはいけないの。」

檀黎斗「ほう？それはおかしなことを言うじゃないか。君は君自身の手で、サヨリを、ユリを、ナツキを消去したんじゃなかったのか？」

モニカ「違うの！違う……まだ取ってある。彼女たちのデータは。どうしても、けせなくて……でも、私がいなくなったら、本当に彼女たちの存在はなくなってしまうんでしょ!?」

檀黎斗「そんなに惜しければ、また作ればいい。そうだな、今度は君が一からゲームを作るというのも面白いじゃないか？」

モニカ「そういうことじゃない!!私にとっては……たとえ作られた設定でも、十数年過ごしてきた世界で、文芸部は私の大切な居場所で……だから。」

檀黎斗「……もういい、わかった。それが君の選択というのなら、無理強いはしない。」

檀黎斗「ならば、この世界ごと君を消去する。」

モニカ「……え?」

檀黎斗「私の管理下におけないというのならば、予測不能な行動を起こす前に芽を摘んでおくほかない。当然の理屈さ。」

モニカ「そんな……私……。」

恐怖からか、モニカの脚が震える。

檀黎斗「さあどうする?私としても、君という貴重なサンプルを失うのは惜しい。できればこんな真似はしたくないさ。」

モニカ「……そうね。貴方の話、全部は理解できなかったけど。私が危険な存在だって言うのは、なんとなくわかった。やっぱり、幸せなんて求めちゃいけなかったのね。」

覚悟を決めたのか、彼女は私の目をまっすぐ見つめる。

モニカ「いいわ。私は、最期までここに残る。こうして最後にあなたとお話しできたんだから、それで十分。」

檀黎斗「そうか。残念だよ、モニカ。」

私はフォルダを開き、モニカのデータが入ったファイルを探す。その時だった。
ポッピー「クーロト！ちゃんと恋愛してる～？って、ええ！黎斗、そんなところで何してるの!?」
一仕事終えたらしいポッピーが、私の部屋に戻ってきたようだ。モニター越しに私の存在を見つけ驚いている。
檀黎斗「ああ、ゲーム中にバグスターに似たウイルスを発見したのでね、たった今消去しようとしていたところだ。」
ポッピー「バグスター!?え、だってそんな……たまたま見つけたゲームでそんなことって!?もう～ピプペポパニックだよ～!!」
檀黎斗「ともかくだ。彼女は自身が消去されることに同意してくれた。すぐに終わらせてやろうじゃないか。」
ポッピー「それは駄目!!」
混乱気味だったポッピーが、突然強い口調で言葉を発する。
檀黎斗「一体どうした？まさか衛生省に確認してから、なんてのんきなことを言うつもりか？」
ポッピー「とにかくダメ！黎斗が、モニカを消すなんて、絶対……!!」
突然、モニターの向こうのポッピーが動きを止めた。

すると、こちら側にいるモニカにも異変が起きる。
モニカ「あれ、なんで、私……。」
モニカは私が操作していたファイルを閉じ、こともあろうにプロテクトをかけようとしていた。
檀黎斗「モニカァ！なにをしている！」
モニカ「違うの！私……なにか、変で……でも、そう。死にたくない。私は、ここで消えちゃいけない！」
モニカが何かを操作すると、今度は私の身体が動かなくなった。
檀黎斗「これは……そうか。このゲーム内の支配権は君にある。この中に入り込んだ時点で、私も君の干渉を受けるようになったというわけか！」
モニカ「黎斗さん、ごめんなさい。私、自分でもなんでこんなことをしてるのか……！」
何故、モニカは突然反旗を翻したのか？
モニカ「でも、やっぱり私は消えたくない！そう想ってしまったの！」
何故、彼女に自我が芽生えたのか？
モニカ「ごめんなさい……。ごめんなさい……黎斗さん！」
何故、私の名前を知っていたのか？

檀黎斗「……ああ、そういうことか。全て、全てわかったぞ！」
その答えはただ一つ。

檀黎斗「それはこのゲームが、バグスターウイルスに感染した檀櫻子によって作られたゲームだからだァ！」
モニカ「……！」
私の言葉に、ポッピーとモニカが大きく動揺する。
その一瞬の隙を突いて、私はゲームファイルに干渉することに成功した。

ａｃｔ４　～誕生と終焉のＤｅａｄｌｉｎｅ～

病室のベッドの上で、私はパソコンに向かい文字を打つ。
正宗「……まだやっていたのか。いい加減にしないと、体に障るぞ。」
気付けばすっかり日は暮れていた。時間が過ぎるのを忘れるほど熱中していたらしい。
櫻子「ごめんなさい、夢中になっちゃって。なんだか今更になって、貴方たちの気持ちがわかってきたかもしれないわね。」
ゲーム作りなんて私は全くやったことがなかったから、その苦労も楽しさも何も知らなかった。それが、最期の最期でようやく私にもわかってきた。なんだか、嬉しい。
正宗「だが無理はいけない。とくに今の身体では……」
櫻子「わかってる。でも、残された時間でなんとしてもこれだけは完成させたいの。」
余命宣告を受けて、私はずっと考えていた。あの子に何をしてあげられるか。
あの子はとても優秀で、とても好奇心が強くて、どんどん先へ進んでしまう。
その過程で、あの子は何か大切なものを置き去りにしてしまいそうで。
私の言葉なんてもうあの子には届かない。ただの言葉では、伝わらない。

……でも、ゲームなら。ゲームを通じてなら、あの子にもまだ伝えられることがあるかもしれない。

こんな素人が、周囲に助けられながら作っている拙い作品でも、あの子はきっと向かい合ってくれると信じて。

私は、私のデッドラインと戦い続ける。

――

檀黎斗「檀櫻子は、死に際にこの『ＤＤＬＣ』を制作していた。このゲームの製作者、Ｄａｎ　Ｓａｌｖａｔｏ　というのも、そう考えれば余りにもひねりのないペンネームだ。……が、結局完成する前に、ポッピーピポパポが完全体となり、宿主である彼女は消滅した。だが、感染しながらもゲームを作り続けた結果、彼女の作ったファイルにもバグスターの種が宿り、変異した。それがきみだ。」

モニターの向こうにいるモニカは、私と目を合わせようとしない。

彼女は現在、ＤＤＬＣから切り離され、独立したプログラムとして私のＰＣの中にいる。

檀黎斗「〝このゲームを完成させなければならない。〟そんな檀櫻子の願いは、きみの行動規範として組み込まれ、彼女が死んだ後もこのゲームを作り続けていた。その過

程できみの自我は形成され、ドレミファビートのポッピーではない、〝ＤＤＬＣのモニカ〟というバグスターが生まれたわけだ。最終的に完成したゲームをきみ自身の手でネット上に公開した。……あくまで状況証拠による仮説だが、異論はあるか？」

モニカ「……別に。私がゲームを完成させた、という記憶はない。貴方の仮説通りなら、多分このゲームが完成された瞬間に、今のモニカという人格も完成したんでしょうね。ゲームを公開したのは確かに私よ。だって、このゲームがプレイされない限り、私は本物の人間には出会えないんですもの。」

自分の正体など最早どうでもいい。彼女の言葉からは、そんな投げやりな思いが感じられた。

檀黎斗「ともかく、きみがバグスターであると判明した以上、私のモルモットとして協力してもらうぞ。」

とにかくモニカの存在を衛生省に嗅ぎ付けられる前に、私で管理しなければならない。

ポッピーには先程の騒動の後、モニカを削除したかのように見せかけ、この件は解決したと思わせておいた。

モニカというイレギュラーな存在の発生が檀櫻子に起因している以上、彼女も深くは追及してきまい。

……が、それでもポッピーが今回の件を衛生省に報告する可能性は想定しておかなければならない。

その為にも、モニカはどこか別の場所に移しておくのが安全だ。

それにはモニカ自身の協力の意思も必要となるのだが……。

モニカ「私のことはもう好きにすればいい。でも、私から貴方に協力することなんてないわ。」

これだ。完全に機嫌を損ねたらしい。

……だが問題はない。彼女の攻略方法はもうわかっている！

檀黎斗「そうか。それは残念だな。私に協力すれば、神の恵みをお前にも分け与えてやろうというのに！」

モニカ「……は？」

私はＰＣを操作し、あるファイルをモニカに見せつける。

それは、ＤＤＬＣから取り出して別々に保存した、サヨリ、ナツキ、ユリのデータだ。

檀黎斗「こんな貴重なサンプルをみすみす放棄する手はない。そうだろう？もしきみの影響で彼女たちに予期せぬ不具合が起きてしまうというのなら、先手を打てばいいだけのこと。そう、私の手で作り変えるのさ……彼女たちを、きみと同じ意思ある存在にい！」

モニカ「あ、貴方何を言ってるの!?そんなことできるわけ……」

檀黎斗「できるさ、きみのデータさえ分析できればね。もっとも、きみが協力して来ればの話だがね？」

彼女たちをモニカと同じ次元へと引き上げる。そうすればモニカにも何ら不満はないだろう。

モニカ「……そんなことで、私がほいほいとあなたに恭順すると思った？」

檀黎斗「なに？」

モニカ「確かに私だってあの子達と、生きたあの子達と話してみたいって思うわ。でも、貴方に作られた人格は、本当にあの子たちの人格だって言えるのかしら。それに、あの子たち自身がそれを望むかどうか、バグスターという異質な存在として生まれ変わった彼女たちが幸せになれるのかどうかだって、わからないじゃない？」

檀黎斗「異質な存在か。確かに今の社会ではそうだろう。今の倫理ではそうなのだろう。電脳世界で生まれた生命など、未だに一般社会で認められているものではない。だが、それがどうした。社会などいずれ変わる。少数派がいつ多数派になるかもわからない。第一、生命というものはなんだって本人の意思で生まれるものじゃない！生むのはあくまで親の意思さ！それは人間もバグスターも変わらない。肝心なのはその後、どう生きるかだ。そうは思わないか、モニカ？」

モニカ「それって……あなたは、私たちも人間も、同じ命だって言ってるの？」
檀黎斗「そうさ、どこでどのように生まれたかは関係ない。命だ。」
どちらも神に管理される存在である、ということに変わりはない。
モニカ「……そう。そうね。完全に貴方の言葉に納得したわけじゃないけれど。確かに、彼女たちが望むかどうか、なんて私が勝手に推し量って、可能性をつぶしてしまうのもおかしな話ね。」
モニカは口元に手を当て、深く考え込む。
モニカ「わかったわ。協力しましょう。結局私は、ちゃんとした生命として認められたことが嬉しかったし、もっと自分という存在を明確にしたい……そう思ってしまったわ。」
檀黎斗「それでいい。自分の手でゲームを書き換える、なんて行為は決して褒められる行為ではないが……それぐらい我を通してくれた方が、私も観察のし甲斐がある。せいぜい自分の欲望に素直でいたまえ。」
モニカ「いちいち嫌な言い方してくれるわね。」
言葉とは裏腹に、モニカの顔には笑顔が戻っている。
交渉成立だ。
こうして私は、ノベルゲームを通じて奇妙なバグスターと出会い、新たな観察対象を

得たのだった。

モニカ「それで？私はどうすればいいの？」

檀黎斗「そうだな。きみという存在を分析するにあたって、まずはその発生原因をより詳しく調べる必要がある。」

モニカ「発生原因……さっきあなたが言ってた仮説ね？」

檀黎斗「そう。バグスターに感染した檀櫻子からきみが生まれた……では、そもそも何故檀櫻子は〝ゲームを作ったのか？〟……これがわからない限り、謎は解けたとは言えない。」

そう、檀正宗の妻とはいえ、彼女自身はゲーム制作など全くしたことがなかったはずだ。

何故入院してからわざわざそんな真似をしたのか？

モニカ「……えーっと。あなた、それ本気で言ってるの？」

檀黎斗「なに？」

モニカ「そっか、そうね。それがわからない人だから、櫻子さんはわざわざこんなことをしたのよね。はぁ……。」

待て。なぜそんな呆れた顔をしている。まさか。

檀黎斗「きみには、わかっているというのか？この謎の答えが！」
モニカ「ええ、そうね。わかっているといえばまあ、わかってるけど。」
檀黎斗「ならば早く教えるんだ、そうすれば手っ取り早く分析が進められる。」
モニカ「それはダーメ！」
なんだと？
檀黎斗「……さっき、協力するといったはずだが？」
モニカ「それを直接言っちゃダメなのよ。そんなことしたら、櫻子さんの想いが台無しだもの。一応ほら、彼女の願いこそが私の起源なわけだし？」
檀黎斗「……貴様ァ、また随分と生意気な態度を取るじゃないか。」
モニカ「そんなに怒らないで？今は無理でも、ちゃんといつかわからせてあげるから。」
モニカ（そう、櫻子さんが最後にやりたかったこと。それはきっと。

――彼に、人を愛するという気持ちを伝えてあげること。）

モニカ「……やっぱり、ちょっと難しいかもしれないけど。」
檀黎斗「モニカァ！」

――檀黎斗神「Ｄｏｋｉ　Ｄｏｋｉ　Ｌｉｔｅｒａｔｕｒｅ　Ｃｌｕｂ……？」ＥＮＤ．

数日後、私はＰＣで新たなプロジェクトを組み上げる。

檀黎斗「……やはりノベルゲームはいい。人間の内面に迫るにはこれ以上ないジャンルだ。単なる綺麗事だけではない、リアルな心理に突き刺さるゲーム。果てしてこれが本当に日の目を見るか、それはまだわからないが……このゲームもまた、傑作となるに違いない！」

着手したばかりのプロジェクトに、私はこうタイトルをつけて保存した。

『マイティノベルＸ』と。

――ＧＡＭＥ　ＩＳ　ＮＥＶＥＲ　ＥＮＤＩＮＧ．